
まのかん

kishegh

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まのかん

【Nコード】

N2861S

【作者名】

kishighn

【あらすじ】

2363年、地上にはミディアンが跋扈していた。化け物が歩き、妖怪が戦い、狂った妖精が跳梁する。人類はバベルと呼ばれるコロニー都市にのみ居住し、その生息域を狭めていた。機械化の進んだサイボーグや、他種の遺伝子を取り込んだブーステッド。彼らの存在は、確かに人類を守っていたが、圧倒的な能力を誇るミディアンの前には、螳螂の斧でしかなかった。

支配者の名を持つ化け物は、それでも人々の中に住み暮らしていた。塵より生じた者は塵へ、ならば、流血より生じた彼は？

イントロダクション

コロニー・バベル。

人類の最後の宿木にして、墓標。

西暦2054年、それまで信じられていなかった事柄が、一気に現実の物として、直接的な被害を受けうる問題として、我ら人類の面前へと出現した。

それまで幻想の産物でしかなく、人々が面白がり、憧れ、時に恐怖した存在が実体を持って顕れた。

ファンタジー
ミディアン
化け物
フリークス
化け物
ノスフェラトゥ

異貌異形の魑魅魍魎 神出鬼没の鬼に霊 妖怪変化に悪魔に魔神

場所も時代も関係なく、主義も主張も関係なく、宗教も歴史も関係なく。

今まで幻想だった物、今まで夢幻だった物、今まで気狂いの戯言だった物が顕れた。

唐突に、不条理に迫り来る災害に、人類は壁を作りその中に逃げ込んだ。壁は高さを増し、厚さを増し、中の空間は上へ上へと伸びていった。

壁に支えられた歪な建築物。

天へと伸び行くバベルの塔。

しかし、その伸び行く先に天は存在しない。

空も、宇宙も、既に神話の空間になった。既に異貌の者の世界へとその姿を変えた。

宇宙では荒ぶる神々が舞い狂い。空では、有翼の魔が飛び交っている。

人類は、閉じた壁の中の世界と、その周辺のみを居住区に暮らしていた。

しかし、外へ広げる事は無く、天へと伸びるも限りがある。

地上から聳え立つ塔は、その地下にも伸び行く塔を形成していた。

地下層、そこを構築するのはあぶれ者、犯罪者、そして光の中を歩けぬ者達。

前話 1

ある言語学教授へのインタビューー

「この度は、モンリツシユの石版の文章解析に成功された、石上悠一郎教授にお話を聞きたいと思います。これで、今まで神秘とされてきた、古代スキタイ文化の研究が今後進んでいく事に期待されるそうですね。おめでとうございます」

「ん？ちよつと違うね」

「何か、間違いがありましたでしょうか？」

「えっとね、石版の解析は目処がついただけ、解析は終えてないよ。そうだね、後はすり合わせがいるから、んゝ30年位かな」

「はあ」

「えっとね、まったく同じ文章が書かれているらしい物を見つけてね。それと合わせることによって解析が進むはず。これはこれで大発見だけど、まあ、そんなに簡単な事じゃない」

「そうなんです、しかし、日本人としては初めて考古言語学の最高権威賞と言われるヒンクス賞を受賞されたんですね」

「あー、あれはね、ちよつと畑違いの僕が見つけたから御褒美じゃない？僕の本分は古代語の解析よりは、言語の歴史的な発展だからね。その辺りじゃない？」

「そうですか、しかし畑違いにも拘らずこんな大発見をするなんて、まさに天才言語学者ですね」

「天才？言語学者に天才なんていないよ。秀才ならいるけどね」

「それは何か違うんですか？」

「言語学なんて知識の集積とその体系化、考古言語学にしたって、ひらめきは要るけど基本的には一緒で膨大な知識の下積みが無ければダメなわけ。天才とは良いにくいよね」

「では先生を含めて、どんなに偉大な言語学者でもそれは秀才だと言う事ですか？」

「うーん、知る限りはそうかな？天才って言われた人が居ないわけじゃないけど、数学や物理学みたいな感じではないよね。結局の所、名前が売れる言語学者って老齢の人が多い。ほら、僕だってもう60でしょ」

「なるほど、それでは、言語学の天才はいないけど、いろいろな物を積み上げた上での秀才はいる。そう言う事ですね」

「いや、そうでもないかな」

「？」

「いやね、言語学者になってないんだけど、1人天才を知ってるよ」

「それは？」

「えつとねえ、今から14年位前かな？僕の知り合いから子供を4ヶ月くらい預かってね。当時12歳位だったかなあ、あの子は天才だったね」

「これを見てよ、当時その子が書いたノートなんだけどね。たった一人で言語を創り上げたんだ。その本棚に入っているノート、全部で300冊以上あるんだけど、それを12歳の子が1人で書き上げたんだよ。これは天才って言うて良い」

「あの？言語を創ったと言うのは？」

「言葉や文字を作ったのさ」

「それは、ハングルを創った世宗の様な事を下と言う事ですか？」

「全然違うねえ。あれは、元々有った言語に文字を充てただけ、ひらがなやカタカナなんかに近いね、しかも、最初の頃は忌語とか、蔑語にしかならなかった。現在彼が言語学上の偉人と言われているのは、後の韓国人の宣伝のおかげだね。しかも、彼が創ったというのは、あくまでも噂話と言うか、知識の無い人間の勘違いだね、彼がしたのは制定。韓国人でも結構彼が創ったって信じている人が要るけど、まあ誤解だね」

「はあ」

「そんなんじゃないくてね、言語を一から創ったんだよ。歴史的な背景、発音、文字、文法、更には歴史的な流れで使われなくなった死語まで、あらゆる意味で言語を創造したんだ。そうだな、まったく言語を持たない人間の集団が、何千年もかけて言語文化を創ってい

く過程。その過程を全てシミュレートした、そう言う事だね」

「12歳の子供が？」

「そうだね、12歳の子供が、たった4ヶ月、いや、実際には3ヶ月くらいかな。それだけの期間でね」

「それが言語学の天才だと」

「そう言って良いんじゃない？」

2013年・中央テレビによるインタビューより。

なお、あまりにも信じがたい内容により、放送はされる事は無く録画テープは保存。その後完全に忘れ去られる。

前話 2

ある老齡の男性と、その孫娘の話。

「吸血鬼を知っているかい？」

「知っているよ」

「それじゃあ、吸血鬼とはどんな者だと思う？」

「怖いし、強い」

「そうだね、吸血鬼は強いし、とても怖い。それは確かな理解だ。それでは、逆に吸血鬼の弱点は何かな？」

「えっと、十字架？」

「そうだね、十字架は大きな弱点だ、他にも聖水やアイコン、聖書の字句にも弱い。それに、陽光、銀、流れる水、ニンニク、香炉や網、麦や芥子の実にも弱いとされている。こうすると多くの弱点があるね」

「そう思う」

「それじゃあ、弱点の多い吸血鬼を倒すのは簡単かな？」

「ううん、思わない」

「その通りだね、吸血鬼は、弱点以上に多くの特技を持つ。身を霧や狼に変え、血を吸い、夜の闇を支配し、闇夜を飛ぶ。高い再生能力や様々な超能力を持っているね」

「催眠とか、後は…？」

「そうだね、催眠を掌る魔眼、死を齎す邪眼、そのほかにも呪術的な能力も持っている。多くの力と知識、そして不死ゆえの経験の蓄積、それらの全てが恐ろしい。しかしね、もっと単純に恐ろしい事がある。もっとシンプルな恐怖の理由があるのだよ。それは何だと思っ？」

「分からないわ」

「それこそが恐怖なのだよ、理解できない、それこそが恐怖の根源だ。私達の理解に余る存在、想像を超える存在、人の形から思いつく全てを鼻歌交じりに超越する、それこそが恐怖なのだよ。空らが理解されてしまえば、それは既に恐怖の対象では無い」

「それは恐ろしい力よりも怖いのか？」

「鉄をも引き裂く臂力、地を割る脚力、生命を瞬時に絶命させる純粹な暴力よりも、見えざる恐怖こそが恐ろしい。それは私たちの中にあるからだ」

「さっき仰ってた、いろいろな能力よりも？」

「私たちは多少知っているに過ぎない。対処療法のようなものだ、そう言った事があった、その対応ならば効果があった。それは確かに理解に繋がる物ではあるかもしれない。しかし、その根本は理解

できないのだよ。何故血を吸う？何故そんなに力も強い？何故様々な能力を持つ？そして」

「そして？」

「何故、死なない？何故、不死性を持つ？」

「それは？」

「なぜならば吸血鬼だからだよ。そう言うしか出来ない恐怖の存在、それが吸血鬼だ。説明がつかないからこそ恐怖足りえ、彼らは人類の怨敵なのだよ」

「吸血鬼は、理解できない恐怖の存在……」

前話 3

田舎町に住む老齡の男性の酒場での愚痴。

「まあ、あれな訳よ。俺もなあ、色々苦労はしてきた、してきたが、あいつほどじゃねえ」

「はあ」

「まあ、聞けや兄ちゃん。あのな、ある若者がな、両親を早くに亡くした訳よ。それで、両親の知り合いの家に引き取られてな、まあ養子になつた訳よ」

「はあ、大変ですね」

「いやな、そこまでは良かったんだがな。この引き取った男は、まあ御人好しでな、その子とも仲良くなつたわけよ。おじさん、おじさんってな、可愛かつたぞ、それに賢かつた」

「それは良かったですね」

「いや！良くない！さっきも言つただろう、良かったのはそこまでな訳よ。この男が御人好しでなあ、お約束のように保証人になつた訳よ、それでそいつに逃げられてな、全部の借金がその男の所へ行つた訳だ」

「大変ですね」

「そーよ、大変だろお。しかも、そんな中、心臓発作で死んじまった。当然、借金も遺産としてその子供の所へ行くわけだ」

「しかし、普通でしたら養子なんですし、遺産放棄をしますよね」

「そーだろ、俺や近所の連中もそう言った訳よ。そんなもんまで引き取る事はねえ、死んだ奴だってそんな事は望んではいねえってな。しかしよお、こう言う訳だ、せつかく出来た絆を断ち切る事はしたくない、それがどんな物でも、絆ならば大切にするってな」

「はあー、今時珍しい。しかし、頑固な子ですね」

「まったくだ、俺達も随分と説得したんだがなあ。折れやしねえ」

「それで、如何したんですか？」

「どうやったかは知らんがな、あっさりと返したよ」

「すごいですね」

「まったくだ。2千万だぞ、それをあっさりとだ」

「すごいですね、今は如何しているんですか？」

「さあな、海外に2週間ばかり行っていたらしいがな、帰って来て金を返した後は、またどこかに行っちまった」

「へえ」

「何であれ、心配だな。天才的な子だったが、あいつは頑固で素直

で一途だったからな」

「矛盾してませんか？」

「そうとしか、言えねえんだよ」

「はあ」

「まあ、あれだ、我ら凡人には理解できんのさね。凡人は美味しく酒を飲もう」

「はあ」

「元気を出そう！凡人同士だ」

C

空間に浮かぶ文字の羅列を、目が追っていく。

……地は暗く、天はさらに暗かった。夜ではない。低くたれこめた黒雲は……

「よお、ファング！お前にしちゃあ珍しいな、ペーパーバックじゃないのかよ」

酒場の片隅で、個人情報端末を使って小説を読んでいた男は、かけられた言葉に顔を上げた。

「ああ、もう古い本でさ、手では持って読めない話だからね。それに、僕はペーパーバックが好きだけど、端末での読書も否定してはいないよ」

「そうかい？まあ良いや、先生様もお久しぶりだからよ、声をかけたんだ。如何したんだい？3日は見てねえぜ」

「十日は来てないよ。仕事でずっと籠っていたからね」

「おお！ってことは新作か、いやあー楽しみだぜ」

「いや、まあ、そっちももう直ぐ出るけどね。今回は本業の方だよ」

「そうなのか、何にせよ期待してるぜ」

ファングと呼ばれた青年の職業は小説書きだ、しかし、声をかけて

きた男に言う新作とは、彼の書く小説ではない。

ホロ・ポルノ。立体映像で表現される立体ホログラムポルノ。

彼はその監督も行っていた。

最初は、彼が書いた官能小説がホログラムの脚本に採用された時、幾つかの演出を行った所を起因とする。

彼の演出を受けた女優は、その女優の持つ魅力、艶美さ、色気を余す所なく発揮し、一躍有名女優となった。その後も、彼の脚本にファンがつき、請われた結果として、定期的に監督演出を行っている。

別段激しい交合や、過激な行為が行われていないにも拘らず、その魅力を完全に引き出した映像は、多くの眼の心を捉えて離さない。以前は、本式の映画監督の話もあったのだが、彼はそれを断っている。

何であれ、こんな怪しげな匂いの漂う酒場にも、彼のファンは多く、彼らは新作を心待ちにしている。

多くの男が、金や力によって女をものにし、娼婦や強姦などによって性を吐き出している中、彼の作る作品の心からエロチックな女性たちは、一種の憧れであった。

一例として、彼が起用して動画になったポルノ女優達は、その後求婚者が殺到するなどと言った事も起こっている。激しい演出や趣向でなくても満足出来る作品は非常に稀有と言えるし、彼女たちはそれだけ魅力を引き出されていたからだ。

特に、強姦や幼女姦淫、ハードなSMさらにはスナッフポルノと言われる殺人までも含んだ非合法ポルノが、一般的に取り扱われる中層下層域では、彼の作品と言うのは、一種の清涼剤とすら言えるのかもしれない。

話が少しそれた。それはあくまでも副業であり（本業よりも実入りの良い副業ではあるが）彼の正業は小説書きだ。今時珍しく、ペーパーバックの紙媒体で出す事をこだわりとしている点は変わっているが、そう珍しくも無い二流の小説書きが彼の本業だ。

一応締め切りを守り、部屋に籠って話を書き上げたファングは、久しぶりに何時も顔を出す酒場に酒を飲みに来た。ちなみに、このマスターも彼の副業の方の大ファンで、酒を安く飲ませる代わりに新作を一番に渡している。見た目は苦み走った良い男なのに、ポルノファンとは少し微妙だと何時もファングは思っている。もっとも、それを作って渡しているのもファングなので、その感想は、いささかお門が違わないかと思わないでもない。

「それで、その古い本ってのはどんな話だ？面白いか？」

「ああ、面白い。そうだな、簡単に言えば、妖怪や化け物が現れる前の世界で、妖怪や化け物の話を想像して書いているお話かな。竜や、黒い獅子、青い一角獣に、ミノタウロスなんが出てくるよ」

「ふうん、よくわかんねえな。そんなもの、外に行けば幾らでも見れるじゃねえか」

別段深い関心も覚えなかったようで、男は適当にそう感想を言った。

「まあ、この本はそうなる前の話だからね。今となっては当たり前

「ただ、当時としては空想の産物だったのさ」

現状生きている人間は、どんなに長生きの者でも150歳前後。既に、平和な時代を知る者はいない。脳を電脳化し身体を機械仕掛けに変えても、脳細胞はよくもって150年。それが人類の寿命の到達限界だった。この酒場にいる者達も、外見上は皆若々しいが、実年齢では10代から100歳越えまで、様々だ。

「まあ、いいさ。どうせ、俺は本なんか読まねえからよ。それよりもだ、十日もここに来ていないんじゃない、知らねえだろうから教えてやるよ」

「何を？ここに來るどころか、ずうっと家で缶詰だ。何も知らないよ」

「そうか、それじゃ教えてやる」

男は実に楽しそうに話をしてくる。彼自身もファンであるファンゲに、何であれ、それが他の人間も皆知っているような内容であれ、教える事が出来るというところに喜びを感じているのだろう。

「あんな、殺人が起こってる。もう7人だ」

それを聞くとファンゲは、少しかり不思議に思った。上層階ならともかく、この中層や、それより下の下層では、殺人など珍しくも無い、それが連続殺人であつてもだ。

「別段、珍しい話とも思えないけど？」

男も、そういった反応が返ってくることは、予想していたのだろう。

指を立てて、チツチと振ってみる。

「まあ、聞きなつて。最初はそうだと思っていたんだがな、段々と変わってきているんだ。黒髪の奴ばかり順番に7人、最初は首を切れかれてた」

「黒髪ね、僕も気をつけないと」

ファングの髪は、灰色がかった黒で、薄暗い所で見れば黒髪にも見える。

「そうよ、それで教えてやらなきゃと思ってな。でだ、次の奴は、両手両足が切り落とされてた。3人目は、首が落ちて股座に縫い付けられてて、4人目は…なんだっけな？」

「指を全部落とされて胃袋の中へ、そして胃の中には大量のジャム」

記憶があいまいだった男の横から、酒場のマスターの助けが入る。

「おお、そうだった。ありがとうよ、マスター。それで、5人目は腸が引きずり出されて、首の周りをぐるりと一周、両足をケツの穴に突っ込んだ。6人目は真横から半身、その半身を壁に貼り付けてあつたらしいぜ」

「そりやまた、エスカレートの激しい猟奇殺人だね。そこまで手をかけて殺すのは、ここいらでも珍しい」

中層で住み暮らすファングでも、流石に眉を顰めるような話だが、男は楽しそうに続ける。話の内容よりも、ファングの注意を引けている状態が嬉しいのだろう。

「だろお。それで、今朝見つかったのが7人目よ。両手両足で段を作って、そこに載せた死体の内蔵を周りに飾り付けてたらしいぜ。画像もネットに上がってお祭状態らしいがな」

「別に見たくは無いなあ。しかし、段々派手になってくるのは分かるけど、単純に技量が上がってるみたいにも考えられるな。ここから加速して、同時大量殺人なんか始めたら面倒だね」

「まあ、適当なところで止めるだろ。組織が何かはしらねえが、中層はある程度のところで落ち着くからな」

「そこを越えた奴は下層に落ちる」

「そう言う事だ。心配はいらねえさ、自分のみだけ守っておきな」

「心配してくれて光栄だね」

はにかむように杯を顔の前に掲げると、男も大きなジョッキを杯に当ててきて笑みをこぼした。

「なあに、あんたの水口が見れなくなったら楽しみが減るからよ」

「それじゃあ、頑張って期待に応えようとするしかないね」

「そのとおりだぜ、大先生」

笑いながら男が行ってしまった後、酒場の隅の暗闇で、独り文章に目を走らせながら、ファンクは酒を飲み干した。

氷が、カラリと音を立てて解け、水滴がグラスから消え失せても、ファングは酒の追加を頼まなかった。

「ご期待に、沿えるように頑張るか」

氷の解けた水のみが入ったグラスを残して、ファングは店から消えていた。

彼はいつの間にか店に来て、いつの間にかいなくなる。

何時からか店に来て、今もこうして店の片隅を愛用の読書場にいる。

ファングと言う名前も、彼の職業も、店の常連ならば知らない者は居ない。

しかし、彼個人の情報を知っている者は居ない。

友人、知人、恋人、家族、それらはファングに繋がらない。

しかし、ここでは誰も気にしない。

それがバベルの中層以下の場所。脛に傷持つ者であっても、言葉にし難い過去を持つ者であっても、受け止め、見ぬふりをする街。

それが、バベル。

人類の墓標にして、終りの住処。

神に沿わぬ者達の住む塔。

R

「髪の毛？」

かつてこう言った書き出しの大作品があったなと思いながら、ローは夫が持っているスーヴに目を向けた。

これから仕事にいく慌ただしい中で、夫の目がカップに止まったまま、動かなかったからだ。

「あ、いや違う。最近物騒だなと思って、ちょっと心配に」

「そうね」

彼らが住んでいるのは、中層階でもかなり上のほう、比較的治安は良いし、一般的な企業人やサラリーマンなどが住む、いわゆるベツドタウンのような立地だ。普段なら、そう心配にも思わないし、下層に近いほうや下層そのものの災害などは、別世界の話といえる。

しかし、つい三日前、近所に住んでいた黒髪の女性が殺された。すれ違う時に挨拶を交わす程度の間柄だったが、にこやかな、笑みの素敵な女性だった。特別な話などはした事も無かったが、彼女が死んだ事はとても悲しい事だった。

同時に、酷く心配になる。

彼女達に子供はまだ居ない、しかし、夫婦共に黒髪だ。近所に住む人の中には、今まで黒髪だったのに、急遽髪を染める人たちも出て

きていた。

「私達も髪を染めるべきかしら？」

「うゝん。如何するかなあ」

ロールは、壁にかけられた時計を見ると、夫を慌てて急がせた。

「あなた、会社の方と待ち合わせて一緒に行くんでしょ。遅れてしまうわよ！」

「ああ、そうだな」

心配や、実際に迫り来る災害とは無関係に、一般市民としての義務や生活は、追いかけてくる。心に不安は残るものの、生活のために、夫は会社と言う戦場へ急いだ。同時に、心配しながらも、ロールも自身の主婦としての生活戦闘へと注意を向ける。

「買い物に行かなくっちゃね。今晚のおかずは如何しようかしら」

結婚してから間もない、結婚までは親と暮らしていたロールは、料理が出来ないわけではないが、毎日作り続けると言う、主婦としての生活にはまだ慣れていない。常々、献立には頭を悩ませる。

「サンライト 陽光灯も買っておかないと、安かったら買い置きしておこうかしら」

完全密閉された塔内で、寝起きを繰り返すうちに人類は、幾つかの弊害を知った。陽光を浴びずに育つと、精神被害や成長阻害、さらには寿命の短命化や病害などが起こることを知ったのだ。

その結果、人為的に紫外線などの、一部有毒ではないかと思われていた成分すら含んだ、サンライト陽光灯が開発された。現在、上層階では建築基盤の段階で陽光灯が含まれているので、わざわざ買う必要も無いが、ロールたちのいる中層階や低層階などでは、個々人が買って室内で使用している。

さらに言えば、最高層の住人の中には、護衛をつけての日光浴を行っている者や、塔そのものの外壁を改造して、陽光取入れ口を作っている人間も居るが、そんなことをロールたちは知らない。

外部とのアクセスも、調査員といわれるような荒くれ者達のみが行っていると思っているし、そんなことは、自分たちにはなんら関係の無い別世界の事だと思っている。

そんな、危険とは関係の無いと信じていた世界に、現在は黒い影を落としているのが、殺人。

彼女たちは知らない。一般市民と呼ばれる彼らは知らない。

猟奇殺人だという事を、連続殺人だという事をかすかに知っているだけだ。

狭い世界の、しかも極端な階層社会の弊害。

完全に近い断絶性。

上層は上層の。

中層は中層の。

そして下層は下層の。

それぞれが、それぞれまったく違う世界、違う国。

だから彼らは知らない、上層でも連続殺人が起こっていたことを。

だから彼らは知らない、中層での殺人がエスカレートしている事を。

中層と一括りに言っても広いのだ。サーフェスと呼ばれる、地表の階を境にして、やはりそこで大きな隔たりがある。

ファング達がいたのは、中層でも下層に近い。

ロールたちが住むのは、中層でも上層より。

一番平和で、争いも少なく、穏やかな人たちの済む場所。

彼らはそう信じている。上層のように権力の争いも無く、金と権力の闘争もない。

下層のように、暴力と犯罪の坩堝でもない。

一般市民の住む平和な世界。

ロールも、その住人だった。

I

フアングは歩いていてた。

薄暗い世界、鉄色の霧と、オイルの蒸気、思い出したかのように明滅する電灯、中層と下層の境界を歩いてた。

彼のほかに歩く者も、そして人の気配も無い。

散歩、ジョギング、そんな平和な行動はこの人間とは無縁の事だ。

いや、そもそもここに、人の営みなどあるのだろうか？

対流の無い所に特有の、滞留した空気に満たされた空間。

彼の住処はここだ、彼の住居はここにある。

普通に考えれば、中層どころか、上層階にも住めるだけの資産は持っているだろう。上層階に引き上げられるだけのコネもある。彼のファンは、上層階にも存在するからだ。

しかし、彼はここに住んでいた。

光の通わぬ、整備もされぬ中層階の最低層に。

仮想の人間からすれば、かえって面倒で、中層の人間からすれば危険。そんなお互いの、一種の気分的な盲点。人のエアスポット、それがここだ。

幾つかのセキュリティーをすばやく解除すると、部屋の中に入り、扉を閉める。入ってきた時とは逆に、各セキュリティーを設定すると、最後にアラームだけをオフにした。

セキュリティーは、あまり大仰にするとかえって賊を呼ぶ、しかし、あまりにも無抵抗でも、やはり賊を呼ぶ。フアングにとって、それは言ってみれば飾りでしかない、猛犬注意のステッカーに近い。

冷蔵庫を開けると、そこには固形物は存在しない。

酒、水、各種の栄養ドリンクに、如何使うのか一般的には縁の薄いブドウ糖点滴や、生理食塩水なども入っている。

彼は、一本の瓶入りのミネラルウォーターを取り出すと、頭からドバドバとかけまわした。

灰色がかった髪は、元から持っていた、赤黒い色へと変わる。

人種といったものが既になくなったこの時代であっても、まず存在しない色だ。変わり者が髪を染めている場合で無ければありえない。しかし、その髪を光の下で見れば、明らかに地毛だと分かるだろう。傷一つ無く、まったく痛んだ様子の無い髪は、染色によってダメージを受けた髪とは印象が異なる。

彼は濡れた服を脱ぐと、ランドリーに放りこんだ。不思議な事に、床には一滴の水もこぼれていない。それに、薄暗いので気付きにくい、外とは違い、部屋の床には少しの埃も無く、空気も驚くほど澄んでいる。

暗い部屋の中、たった一つだけ赤い明かりが点いている。

彼がその明かりに触れると、壁銃に埋め込まれたモニターやデータ表示機の数々が、一斉に起動した。暗かった部屋に、明かりがしみこむ。

中央の一際大きなモニターの前に座ると、前にキーボードがせり出してくる。いまや常識となった、口頭指示でも、ホログラフィックキーボードでも、動作視認指示でもない、古めかしい、実体を持ったキーボードだ。

「殺人・人体解体・個人・黒髪」

すばやくキーワードを打ち込むと、コンピューターの隅で、人工^オ調律^{オートマトン}データ生命体が緑の光を点す、確認の合図だ。

ファングは、それを確認すると、再び赤い光点に触れる。

瞬間、光は消え失せて、唯一赤い光のみが部屋に浮かぶ。ファングは、しばらくその場で座っていたが、やがてベッドのシーツの中に、その裸体を埋めた。

寝息すらも聞こえない、穏やかな空間は、突然の光とアラームに引き裂かれた。

モニターが一斉に点灯し、先ほどのオートマトンがけたたましく叫びを上げている。

ファングは無言で起き上がると、モニターをざっと見渡した。モニターには、静かな住宅と、口に物を詰められて震えている女性の姿

があつた。ファンゲは急いで服を着る、漆黒のシャツとチノパン、身体にそつたジャケットを羽織り、口の中で何かを呟く。

「……………」

次の瞬間、ファンゲの姿は部屋から消え、モニターの明かりもアラームも鳴りを潜め、部屋には再び赤い光点だけが残った。

M

部屋には血が飛び散っていた。

白い壁紙、薄青緑のカーテン、籐編みの籠にはアロマキャンドルと練り香が入っている。間接照明と、静かに回る空気清浄機、どれもがこじんまりと纏まって、一人暮らしを謳歌する女子学生、もしくは若い勤め人の女性、そんな主人の似合う部屋だ。

しかし、その全てには、部屋の中で血袋を振り回したかのように、血が飛び散っている。

いや、正しくそれなのだ、凶行の主は、鋭い刃物で心臓を取り出し、それを踊るように振り回した。結果として、部屋には赤い螺旋の糸が舞った。

血の描く二重螺旋の只中で、男が女性の身体に身を埋めていた。

人形のように動かない女性は、いまだやわらかさと、その体温を保持していた。しかし、心臓を抜かれ、胸に男性の頭が入り込んだ状態で息を保つ人間は居ない。

男の身体が動きたび、肉の千切れる音、骨の折れる音、そして間接と肉のきしむ音が聞こえる。

部屋には広く血が撒き散らされている。しかし、この惨状の後に、この部屋に入った者は気がつくだろうか。

死体から床に広がる血、そして身体に残された血。

この総量が異様に少ない事に。

狂人の晩餐は終わり、その主も既にここにはいない。

残された死体は、心臓をなくし、四肢を違え、頭骨は開かれ、脳は正確な方形に切り取られ、その開いた胸に、心臓に代わって鎮座している。

先の被害者に引き続き、邪神を奉じる祭壇か、黒魔術の儀式にイメージの繋がる姿を作り上げていた。

「血を飲み、肉を喰らう、さらには儀式にも似た行動か」

人の気配の無い空間に、ゆっくりと天井から降りてくる姿があった。

天井から染み出るように部屋に現れたファングは、中空に浮かんだまま、使者を見下ろす。

顔だけ綺麗に血を拭われたその遺骸は、かえって凄惨さを増していた。

ファングは、一瞬黙祷をささげ、手を合わせる。

あくまでも偽善の行為でしかない、死者は既に死んでいる。死者の世界が既に隔絶されているならば、別世界におけるファングの行動は、使者にとってなんら関わりのないことだ。

そして、もしも死者と言うものに霊が存在し、彼を観測できるならば、死者は怒りに震えるだろう。

ファングがこの場に着いたとき、被害者はまだ生きていた。

さらに言えば、一本の傷も無く、身体的な被害はなんら受けぬまま、ファングによって助けられた可能性もある。いや、そうなただろ
う。

だが、ファングはただ静観していた。

被害者が、寿命を縮める恐怖の中で、それでも生者として、被害者で終わるか。

死者として、狂気と暴力の惨状に伏すか。

結果として、ファングは後者への道を選択し、被害者は死者へと変わった。

すでに人間としての尊厳をなくし、破壊の限りを尽くされた彼女は、もはや人間ではない。

死体。

遺骸。

単なる物質としての骸むくろに変わり果てた。

それを静観した者が、何故黙祷などささげる。なぜ手など合わせる。

偽善としてもあまりに酷い。

しかし、ファングの顔はただ青白く、赤みの強い髪と相まって、その印象はさらに強いまま、彼女の骸を見下ろしている。

「血を摂取していた事に間違いは無い。肉も少なからず食べている。脳と心臓、胸周りの肉と脂肪、それは間違い無い。しかし、なぜ奉る、なぜわざと猟奇的な行動を取る？これは、起源の影響か？それとも彼の個性か？」

辺りに撒き散らされた血にも、視線をめぐらす。

「もしや、人としての意識が強い結果として、かく乱のための演技？過去にあまり例の無いケースだな」

思考のループに入ったファングは、軽く首を振って、この場での考察を諦めた。

ブツブツと呟きながら考えるのが彼の癖のようだ。

ファングは再び遺骸に一礼すると、部屋の扉を蹴り壊して、部屋から消えた。

せめて、発見され、早く茶毘に付されるほうがよいと願いながら。

その時、ロールが感じていた違和感をなんと説明したら良いだろう。ベベルの中において、静寂とは一般人には縁遠い物だ。外壁を全て機械や、配管、あらゆるものの動きが覆い、常に何かの音を感じる事になる。

しかし、その時ロールが感じたのは静寂だった。

人、物、空気の流れや、遠くから響いてくる音の波すら感じない。

恐らく、彼女が注意していれば、もしくは、彼女が何らかの形で経験を積んでいれば、その違和感を確固とした物として感じただろう。しかし、彼女はあくまでも一般市民で、普通の主婦で、若い女性でしかなかった。違和感は違和感のままで、その場を通り過ぎようとした。

買い物帰りの、袋に食材を抱えたままで、家路を歩むロールは、感じる違和感から少しづつ早足になっていた。

「そのの、娘さん」

道の角を曲がろうとした時、壁に隠れていた場所からロールへ声が掛けられた。

「はい？」

「なにやらお急ぎのようじゃが、せつかく買った物を落としてしまったは、もったいないのお」

声をかけてきた椅子に座った、老人が指す指の先には、彼女が今さっき買ったばかりの缶ビールが転がっていた。夫の晩酌用に買ったおいたものだ。

「あ、どうもご親切に」

「なになに、もったいないと思えばこそじゃ。礼には及ばぬと言うもの。しかし、何をそんなに急いでいらっしゃるのかの？」

違和感に焦っていたロールだったが、老人の温和な笑みに幾ばくかの安心を覚えた、そもそもが根拠の無い不安、他に何らかの要因が介入すれば、忘れてしまうような物だった。

「あ、その、最近物騒ですし、何と無く」

「ふむ、なるほど。しかしじゃ、娘さん、目に在るものを見る、心に思つて遇うとも言う、心配しているものほど、何かに巻き込まれたりするものよ。ほれ、虫が嫌いな人間が、いの一歩に虫を見つけたりするじやろう？」

「た、確かに」

ロールは、穏やかに話す老人を前に、まるで自身が、見えないお化けを怖がって泣く子供であるかのように思え、顔を赤くした。

「しかし、用心するのはとてもよいことじゃ。特に娘さんのよう

な、美人さんならばなおさらじゃの」

「そんな」

「さて、せっかく急いでいる娘さんを、これ以上爺の話し相手にするのは悪い。気をつけてお帰りなさい」

「はい、ありがとうございます」

軽快に駆け出すロールは気がついていなかった。先ほどまで感じていた、違和感、そのものが無くなっていることを。そして、先ほどまで話をしていた老人の姿がすでに消えていることを。もっとも、後ろを一回でも振り返ればこれには気がついただろうが。その時彼女は、惹かれるように家に帰っていた。

家に帰った彼女は不思議な光景を目にする。

仕事に行き、夕刻までは帰らぬはずの夫が、すでに帰っていたのだ。

「あなた、今日は如何したの？」

浴室で、シャワーを浴びつつ、風呂桶に湯をためている夫が応えた。

「ああ、心配だし、有給も消化しなきゃならない。今日と明日は休みを取った」

「そうなの？それなら、朝のうちに言っておいてくれたらよかったのに」

「まあ、会社に行ってから、思いついたからね。それより」

途端、ロールは夫に腕を引かれた。驚きの声を上げるまもなく、浴室で全裸の夫の腕の中に取り込まれる。

「せっかくの休みだから」

「もー、こんな時間から」

軽く文句は言いつつも、その意に従って、いそいそと服を脱いでいくあたり、やはり新婚さんは新婚さん。自分の服を、ランドリーに入れようとしたところで、彼女はあることに気がついた。

「あれ？洗濯回してるの？」

「ああ、コーヒーをこぼして」

いつもなら、コーヒーをこぼそうが、ケチャップをつけようが、そのままにして置く夫が、なぜこのときは自ら洗濯をしたのか。彼女は、それを不審に思わなくも無かった、しかし、次の瞬間、彼女は再び夫の腕の中にあつた。

キスで口をふさがれ、力強く抱きしめられると、そんなことは気にならなくなってしまう。先だつての、老人との事と言ひ、今回の事と言ひ、比較的夫の浮気などに気がつきにくい性格なのかもしれない。

少々今後の結婚生活が不安になることではあるが、今はなんら関係ない。重要なのは、彼女は夫と、バスルームでの運動に入つたという事だ。

ただし、少しいつもとは違う事がある。

彼女を掴む夫の腕が強い。

彼女を触る夫の指が固い。

彼女に触れる夫の爪が長い。

彼女が搔く夫の背の皮が固い。

何よりも、彼女を貫く夫が、固く、深く、激しく、強い。

あまりに激しい交合に、途切れ途切れの彼女の理性が、あまりに多い違和感を組み合わせる。

なぜ？と。

誰？と。

そして、飛び去ろうとする意識が彼女に見せたのは、自身の首筋に噛み付く夫と。

天井の電球から染み出してくる老人。

「……………」

天井の高級から現れた老人が呟いた言葉は、一体何の意味を持っていたのだろうか。

理解しえぬ、音としては聞こえる、口を開いているのも分かる。

鳴き声に有らず、悲鳴でなし、同国とも程遠い。

狂人の紡ぐ、意味不明の音の羅列とも違う。

意思と、意図と、意味を持った言葉。

言語。

それが意味を持つ言語だという事は、あまりにも当然のように感じられた。

それに不審は持ち得ない。

その言葉に不備は無く。

間違えよつの無い知性の色を持つ言語。

老人が言葉を並べたその次の瞬間、ロールと夫を、重力の糸が取り巻いた。中空に留められ、身体も腕も脚も髪も、ふわふわと浮かん

でいる。それどころか、シャワーから出ていた湯や風呂桶の中の湯まで、彼らの周りを浮かび飛んでいた。

夫とロールは、少しの間をおき浮いている。二人に違いがあるならば、夫には数え切れぬほどの黒い針が刺さっているところだろうか。もっとも、ロールに自分の姿は見えていない、首も目も動かせないのだ、自身の身体がどうなっているのかは分かっていない。

「説明の、しようも無いが、あえて話そう。それが私の義務であり、同時につまらない矜持でもある」

白髪に、深いしわを顔に刻みつけた老人から、見た目とは反する若い声が聞こえる。そこに違和感を感じぬでもないが、今やそんなことは些細な事だった。

普段生活していた穏やかな時間、新婚生活の幸せ、それらは今、全て遠くに感じる。

「今は喋れまい、とりあえず落ち着いて聞いてくれ」

「……………」

彼の言う事は理解できる、いや、途中までは出来た。しかし、一度口の動きを止めたあと、再び開かれた口から流れた言葉は、彼女の理解に無かった。先ほどと、同様に。

しかし、彼女に訪れた変化だけは、理解できる、と言うよりも、理解を促す物だった。

混乱する自分。

己の痛みに泣く自身。

そして、冷静に現状を把握しようと努め、落ち着いて考える自己。

それらに分かたれた、理性、本能、感情は別々の境地ではあったが、つながりを保ち、お互いに影響は残しながら、違うベクトルの中で働いていた。

その内の、冷静な理性が彼女に理解させた。現状の不可思議な光景は、この老人によって起こされている。そして自身は夫に喰われ、傷ついた。それを、老人は説明してくれると。そう、理解できた。

「何から話すべきだろう、すでに幾度もしてきた行為のはずなのに、毎回、毎回、悩む。そうだな……通り名は、ファングと言う。もつとも、それを話したところであまり意味は無いが、せめてもの礼儀として」

ファングの言葉と共に、白髪は色を取り戻し、赤黒い色のつややかな髪へと戻る、皺は伸び、若さを表す張りのある肌が産まれた。唯一変わらず残るのは、どこかに諦念をおびたその瞳。

「君の夫について説明しよう。」

彼を襲った事象は、てんいだいかくせい転異大隔世と私が呼んでいる現象だ。

てんいだいかくせい転異大隔世

それは、言ってしまうえば、埋伏しているコンピューターウイルス。ある一定の行動、ある一定の状態、前もって登録された状況になっ

た時、初めて発動する変化。

外界を跋扈する妖魔の中には、他人と血の混じる物もいる。

そう言った行動の末に産まれる者は、デミフルート人魔と言う。

しかし、彼は人魔ではない、いや、では無かった。

しかし、彼の先祖に、強い力を持つ妖魔の呪いを受けた者がいたようだ。その時設定された条件は、悲しい事に達成され、彼は魔に堕ちた。

恐らく、彼の場合は、愛する者の血肉を摂取する事。流石にこれは推測だが、血と肉の両方を取って始めて覚醒したところを見ると、ここ数週間のうちに、あなたの血だけを、彼が飲んだ事があったんじゃないか？それが起因だったのだろう。

そして、そのきっかけから、時間経過による変化は始まり、今、お前の夫は夫でない者に变化した。

人に害成す存在へと転異した。

そして、人ならざる者に堕ちた君の夫は、私が終わらせる」

能面のような。

白塗りの仮面のような、動きの無い顔、変化の無い声、見えない感情でありながら。

確固たる意思と、決意、そして底に横たわる覚悟を持って。

彼の言葉は、紡がれた。

「ここまでの、私の言葉に嘘はない、証拠も、根拠も、あらゆる裏付けを提示する事は叶わないが、それだけは言っておこう。つまり、君の夫は今死ぬ。私が殺す」

彼は、くどい程殺人の意思を繰り返した。ロールは、その言葉のたびに心を揺らしたが、表面に出ている冷静な理性はそれを表面に現さなかった。心が叫んでも、本能が吼えても、感情が唸り轟こうと、理性は冷静に、そして冷淡に話を聞いていく。

「彼を助ける術はない。だが、しかし」

ロールの前に、光る鏡面が現れた。首から下は朱に染まり、白い肌は青みを増した身体が浮かび上がる。

「死にゆく君を助ける事は出来る。血を止め、肉体の損傷を直し、完全に治すことは容易だ、傷跡すらも残らない。そして」

目の前から鏡面が消え失せると、どこかへ目をそらすファングがいた。

「君が望むなら、記憶を改竄し、意識を変え、あらゆる周囲環境を、君に関わるあらゆる事象を、何も無かったことにも出来る。君は結婚しておらず、夫は居らず、静かに別の場所で、別の生活を送れる。つまりは、別の君にもなれる」

それは、悪魔の笑みなのだろうか、そらせていた筈の目を、ロール

へ戻したファングの顔は、笑い、怒り、悲しみ、同時に絶望していた。先ほどのあまりにも無い感情の色を思えば、今は、あらゆる絵の具を混ぜ合わせたような、それでいて、混ざりきっていない混乱の色が見えた。

「もしくは、そのまま死ぬかね？そのままなら君は死ぬ、筋書きも簡単だろう、殺人犯だった夫は、何人かの人を殺し、君を殺し、そして自ら死んだ。三文小説のような、つまらない筋書きだ」

「如何する？」と、ファングは目で問いかけていた。

そして、感情の全てが再び融合した彼女の精神は、今なお叫びを上げながらも、一つの答えを導き出した。

「……」

「そうか、では、君の思うように。君が望んだ形で」

パンツと言う、ファングの手のなる音と共に、彼女の意識は黒に塗りつぶされ、その闇の中に、ファングの顔も溶けて行った。

それは、どこか安心したような顔だった。

薄暗がりのバーカウンター、何時もの定位置でファングは本を読んでいた。髪を一枚一枚捲り、ページの進行を楽しみ、文字を喜びを持って追う。

「よお、ファング。今日はやっぱりペーパーバックか、やっぱりあ

んたは変わってるな」

先日と同じ、声をかけてきた男に、フアングは目を向けた。

「ああ、そうかもね。やっぱり、この方が落ち着くよ」

「そうか、しかし、あんたの言ったとおり、あのサイコキラーもいなくなつたみたいだし、落ち着いたって良いわな」

「そうだね、安心して本が読めて、酒が飲めれば、平和で良いさ」

「俺は本はいらねえよ。だが、酒と女が無きや平和じゃねえさ」

笑いながら、男が去ると、アルトは静かに呟いた。

「死ぬ…か。やはり彼女も死ぬと言った、死を望むほどの絶望…逃避…それとも混乱？分からないな、僕には分からない」

酒を飲み、再び本に目を落とした。

令部までやってくればこれで自分を撃つためのもので、この男の覚悟というのは、その日常と同様、簡単明瞭であつ

「死は、覚悟なのか。それとも絶望なのか。逃避なのか。何らかが在るからなのか、もしくは無いからなのか」

何度読んでも、楽しめる物を名作と言う。

しかし、彼の疑問に思っている事は、本を読み、人の経験を見てもわからない物だ。

「彼は死に、彼女はそうなった…か」

Lord Of Crimson

「新作、良かったよ」

無くなった酒を注ぎに、マスターがボトルを持って目の前に現れた。そして、彼のいう新作とは、今日出したばかりの、新作ホロポルノだ。ちなみに、大ファンであるマスターは、ファン自身が業者に頼んで、出版されたその日のうちに、宅配されるようになっていた。

「もう、見たんですか。早いですね」

「当然だな、素晴らしい楽しみは、出来るだけ何度も味わいたい物だ。酒のように飲んだところで、無くなるようなものでもない。ならば、なるべく早く見るべきだろう」

「お褒めに預かり光栄ですよ。副業の方ですがね」

ファングとしては、少しばかり複雑な心境でもある。やはり、彼の定義する本業は物書きであり、書いた官能小説を褒められるならともかく、監督業を讃えられてもあまり嬉しくない。

「いやはや、君にとっても今作は新境地ではないのかな？ 一切の合体シーンや、自慰のシーン無しにあそこまで色気を出すとは。いやあー、素晴らしい」

「それは、どうも」

「しかし」

「しかし？」

「いや、あの女性は素晴らしいと思ってな。如何だろうか、私も独身ではあるし、ご紹介願えるならば光栄だが」

フアングは、口を円く開けて、呆けた顔を見せた。同時に、なんと言ってよいのか分からず、そのまま席を立とうとした。

「おいおい、そんなに驚くような事か？言に君は、何人かの女性をすでに紹介した事もあるそうじゃないか」

「あー、いやね、あなたに言われた事に、少なからず驚愕を覚えましてね。それに」

「それに？」

「彼女はすでに嫁ぎました。それを紹介するのは、流石に難しいですね」

それを聞くとマスターは、激しい衝撃を受けたようで、軽くふらりとよろめいた。フアングの思っていた以上に、惚れていたのか、もしくは激しく純情なのか。

「未練だとは思うが、誰と一緒にあったか聞いても良いか？」

「ええ、恐らく数日中にはあなたの耳にも入ると思いますからね。ロイターですよ、ロドの次男の」

「花屋か！」

ロイター・ロド。彼は、下層域において、もつとも善良と呼ばれる人間だ。かなりの縄張り、武器の売買に大きな支配権を持つロド家の次男だが、そちらの家業には関心なく、穏やかな生活を営んでいる。

彼は特異な才能と、やや変わった趣味を持つ人間で、いわゆる緑の指の持ち主だった。植物の育成、栽培に関しては、意欲も、そして才能も並ぶ者は少なかった。彼は植物が栽培できれば幸せで、人類全体の問題も、それぞれが植物を愛で、平穏に暮らすことで解決できると思っていた。

彼は、親の用意したドーム内で植物を育成し、その花を親に渡していた。

もつとも、彼が育てているのは、ケシの花だ。麻薬の原料、悪魔の植物だ。

彼は、ロイターにとって、全ての人間は善良だった。幼児が信じるように、彼にとって全ての出来事は希望に満ち、彼にとっての幸せだった。

彼は愚かでもなく、知識の障害や、能力の弊害があるわけではなかったが、ただただ、悪意や欲望と言うものを感じる事、また、それを理解する事は出来なかった。

いや、善悪そのものが、彼にとっては差の在る物ではないのかも知れない。仮に、目の前で誰かが誰かに殺されても、彼にとっては殺人者を悪とは思わないだろう。彼は、ただ死んだ人間に涙を流し、その死を悼み、棺には彼の育てた花を手向けるだろう。

別階層にいる人間。周辺の、彼を知る人間は、侮蔑と不理解、そしていくらかの憧れを込めて、彼をお花屋さんと呼んでいる。

「そうか…花屋か」

「彼女は平穩を望んでいたようですし、彼といれば決して不幸にはならないでしょうね。彼を見ている限りにおいてはですが」

「周りを見なければ…か」

「そう、知らなければ」

「そうか、あの黒髪の女性は幸せになるか…ならば、まあ、仕方が無い」

「ええ、幸せになると思いますよ。そう願っています」

少しばかり落ち込んだマスターが、他の客の相手に移動すると、フアングの小さなため息がおちた。

「知らない事の幸せ、知る事の恐怖か…しかし、マスターのつぼは黒髪若奥様が、今度誰か紹介してあげようかな。しかし、人は面白い」

薄暗い中で、本に再び目を落とすフアングの顔に剣呑な笑みが浮かぶ。

「実に興味深い」

Lord Of Crimson (後書き)

第一章の終わり。

よく考えたら、主人公以外に異能が出てこない。
タグに偽りあり。

あとがき

一応、つかみのつもりで書いた小説ですが、つまらなかったの
これで終了。

ですが、同じ舞台で、同じ主人公で別の話を書きます。

内容は頑張つて、ピカレスクサイエンスファンタジー。PSF・・・
略しても何の意味も無いですが・・・

さてさて、本来「まのかん」で何を描きたかったかというところ、超
越者の暇つぶしでしたが、あまりにも暇すぎて何にも出来なくなつて
ます。

このあたり、書き止っている「CUPID・S DEAD」での
反省がまったく生かされてません。

不条理を不条理のまま書けるのは、正確の問題だと思います（才能
はとうに諦めてます）

そのあたりもう少し考えなくてはならんでしょうな。

あとがきを200文字埋めようと思ったら、普通の愚痴になりました
たと言う話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2861s/>

まのかん

2011年4月14日22時45分発行